

ある医療観察事件被害者遺族の声(殺人により兄を亡くした A さん)

加害者と面識があるという理由で、私は審判を傍聴することができないと通知されました。加害者が私の顔を見ることで、病状に影響が出る可能性があるということでした。その説明を聞いたとき、私は、
「では、被害者である私の気持ちはどうなるのだろう」と思いました。

加害者の病状を守るためには配慮がされる。
けれど、兄を突然奪われ、残された私が何を知りたいのか、何を望んでいるのかは、誰にも考えてもらえないのだと感じました。「ここには、被害者としての私の権利はないんだな」そう感じたことを今でも覚えています。私はもともと身内が少なく、兄を亡くしたことで、さらにひとりになったような感覚がありました。

そのうえ、事件について知りたいと思っても知ることができない。
審判を自分の目で見ることもしない。
何をお願いすればいいのかも、誰に訴えればいいのかも分からない。ただ「できません」と言われたことを受け入れるしかありませんでした。誰にも寄り添ってもらえなければ、被害者には何もなす術がないのだと思いました。
本当に孤独でした。

今なら思います。加害者と顔を合わせることができないのであれば、別の部屋から審判の様子を見たり聞いたりすることはできなかったのか。
私の代わりに弁護士が傍聴することはできなかったのか。
終わったあとに、審判で何が話されたのか説明してもらうことはできなかったのか。

何か一つでも方法があったのではないかと思います。でも、当時の私には、そんなことを主張するための知識がありませんでした。

家族を突然亡くした直後の人間が、自分で制度を調べ、自分にどんな権利があるのかを調べ、誰に何をお願いすればいいのかを考えて行動することは、とても難しいことです。私は、言われたことを受け入れることしかできませんでした。今でも、そのことを後悔しています。私が知りたかったことは、とても単純です。兄が、なぜ亡くならなければならなかったのか。それを知りたかったのです。

兄にも、この先の人生がありました。
やりたかったことも、見たかったものも、これから過ごすはずだった時間もあったと思います。そのすべてが突然なくなりました。その兄の未来を奪った加害者が、事件について何を話しているのか。今、どのような状態なのか。

何が起きて、なぜ兄が亡くなることになったのか。私はそれを、自分の目で確かめたかったです。

ところが、私が知ることのできた情報は、本当にわずかなものでした。渡された資料も黒塗りばかりでした。兄がどこで亡くなったのか。

そのような限られた事実を、黒く塗られた資料の中から知ることしかできませんでした。兄は亡くなっているのに、私は兄に何が起きたのかさえ十分に知ることができない。そのことが、とても苦しかったです。もし起訴され、通常の刑事裁判になっていれば、裁判を通して事件について知る機会があったのではないかと思います。それなのに、医療観察制度に移行すると、なぜこれほどまでに事件についての情報が被害者や遺族の耳に入ってこなくなるのでしょうか。私は今でも、そこが理解できません。

責任能力がないと判断されたことは、制度上の判断なのだと思います。治療が必要であることも理解しています。

でも、私の兄が亡くなったという事実は変わりません。どの制度が適用されても、人が一人亡くなっているという事実は同じです。

それなのに、責任能力がない、医療観察制度に移行した、ということで、被害者や遺族まで事件から切り離されてしまうように私は感じました。加害者には治療があり、病状への配慮があり、その後の人生があります。

では、残された被害者や遺族はどうなるのでしょうか。私たちにも、その後の人生があります。何が起きたのか分からないまま、なぜ大切な人が亡くならなければならなかったのか分からないまま、それでも生きていかなければなりません。せめて、知ることくらいは許されてもいいのではないのでしょうか。

私は、加害者の治療を妨げたいわけではありません。ただ、加害者への配慮を理由に、被害者や遺族が何も知らされず、何も見ることができず、何も選ぶことができない状態にされることには、今でも納得ができません。

被害者と加害者が直接顔を合わせることが難しいのであれば、別室で審判の内容を確認できるようにする。

代理人が傍聴できるようにする。

審判後に、可能な範囲で何が話されたのか説明する。

今後の流れや、被害者が利用できる制度、選択肢について、こちらから調べなくても説明してもらえるようにする。

そうした方法を考えてほしいです。そして何より、家族を亡くしたばかりの人に「自分で調べて、自分で声を上げてください」という制度にはしてほしくありません。

あのときの私は、そんなことができる状態ではありませんでした。悲しみの中にいて、何が正しいのかも、これから何が起こるのかも分からず、ただ必死でした。そんな人間に制度の知識がないことを理由に、知る機会や選択する機会まで失わせないでほしいです。

誰か一人でも、
「こういう方法があります」
「あなたにはこういう選択肢があります」
「知りたいことはありませんか」
と声をかけてくれていたら、私が感じた孤独は少し違っていたかもしれません。

私は兄を取り戻すことはできません。だからこそ、せめて何があったのかを知りたかった。兄がどうして亡くならなければならなかったのかを知りたかった。それすら十分にかなわなかったことが、今も心に残っています。

医療観察制度の中で加害者の治療や病状を守ることが必要なのであれば、それと同じように、残された被害者や遺族のことも見てほしいです。加害者への配慮と、被害者への配慮は、どちらか一方しかできないものではないと思います。

今後、同じように突然大切な人を奪われた人が、私と同じように「自分たちは置き去りにされた」と感じるような制度にしてほしい。

何も分からないまま、何もできないまま、ただ受け入れるしかなかった私の経験を、これからの制度を考える際に生かしていただきたいと強く願っています。